

5-4 移送手法の検討(案)

- ◆ 捕獲した個体を新越冬地の形成予定地に移送し、定着させる。
- ◆ 現時点でナベヅルが定期的に渡来しており、社会的、環境的条件がある程度整っている地域を最初のモデルと想定して実施する。
- ◆ 移送先で越冬中の個体とともに北帰行させることにより、新ルートを学習させるため、若い個体が適当。
- ◆ 羽数がある程度確保し、移送先でのツルの縄張り意識を薄め、かつ翌年以降の渡来の可能性を高める。

利点	課題
ツルの渡来先をある程度コントロールできることから、受入地での準備がしやすい。	費用対効果が低くなる可能性。 どのくらいの期間で目標に達するか不明。 他の鳥類種においても越冬地での実施例がない。

1 捕獲手法の検討

0) 捕獲せずに誘導する方法あるいは出水に来る前に捕獲する方法

1) 捕獲対象個体

- ◆ 新越冬地での定着を図るために、出水への渡りの経験の少ない当歳個体が望ましい。この場合、家族群を捕獲し、親鳥はすぐに放鳥、当歳個体のみを移送のため確保する。一回の捕獲で確保できる羽数は1～2羽。
- ◆ 次善の策として、非繁殖個体からなる亜成鳥群れを対象とすることが考えられる。

対象個体	メリット	デメリット
当歳個体	渡りの経験の少ない	1度に1～2羽 家族を人為的に引き離すことへの社会的理解が必要
非繁殖群	一度に複数個体が捕獲可能	少なくとも2回出水への渡りを行っており、越冬地が固定している可能性がある。

2) 捕獲技術 (参考資料 5-4 の 3)

- ◆ かつて出水で行われたツル類の捕獲手法は、標識調査でのロケットネットによるものと、鹿児島県による長期的ツル類保護対策調査研究事業でのビニールハウス型の仮設トラップによる試験が行われている。

- ◆ ロケットネットは火薬の取り扱いに関する制限から、今後はキャノンネットの使用が考えられる。

捕獲方法	メリット	デメリット
キャノンネット	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 海外や豊岡のコウノトリでの捕獲実績あり ◆ 家族群の捕獲を行う場合、対象を絞りやすく、非繁殖群を対象とした場合、多くの個体を捕獲できる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 火薬を用いるため、有資格者が必要。 ◆ わなの操作に習熟が必要。
仮設トラップ(フレーム罠)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 有資格者等が不要なため越冬期間をとおしての捕獲が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ わなへの順化期間が必要。 ◆ 場所を変えて捕獲する際に、トラップの移動が困難。 ◆ トラップの作成・維持にコストがかかる。

3) 捕獲時期

- ◆ 10～11月に実施。
- ◆ 移送先で馴致が必要なため、可能な限り越冬期間の早いうちに行うことが望ましい。
- ◆ 越冬後期で馴致時間が取れない場合は、移送先で翌年の越冬期まで飼育することが必要となる。

4) 捕獲羽数

- ◆ 少数個体を放鳥した場合、すでに縄張りを確保している個体による追い払いが発生する。これを防ぐためには、30羽程度以上の群れを形成すると良いとされている。一方、複数個体を飼育する場合に、争いが発生することの検討も必要である。
- ◆ これまでの周南でのナベヅルの放鳥例（参考資料 5-4 の 1）では、追い払われた放鳥個体も給餌場周辺にとどまっており、捕獲個体数が少ない場合でも放鳥は可能と考えられる。

2 移送、一時飼育の検討

- ◆ 捕獲した個体は、出水での保護ゲージに収容後、移送となる。移送手法は現時点でもナベヅルの保護個体の周南市への移送実績がある。
- ◆ 移送先でも地域への順化のため一時的な収容施設が必要である。

3 放鳥について

- ◆ 1月末までには放鳥を行う必要がある。
- ◆ これまで周南市で行われたナベヅルの保護個体の移送放鳥（参考資料 5-4 の 1）は、移送の時期が越冬期後半であったため、次の越冬期の初期（11～12月）に放鳥されている。これは、越冬地として周南市を認識させるためと、長期飼育による飛翔力の低下から回復させるためである。放鳥後にねぐらを利用するようになるのに 9～30 日を要していることから、同シーズンにナベヅルを放鳥させるためには、1月末までには放鳥を行う必要がある。

4 必要とされる技術等

- ◆ 捕獲手法の検討（捕獲方法、捕獲場所の選定等）
- ◆ 多数個体の飼育技術の確立（捕獲時期が遅い場合は長期飼育が必要）
- ◆ 放鳥時期をどのくらいまで遅らせることができるかの検討（放鳥時期を遅らせることができれば、捕獲期間を長めに設定できる。）

5 必要な調査等

- ◆ 放鳥個体の個体識別による移送地への定着状況のモニタリング
- ◆ 放鳥個体の行動調査
- ◆ ツルの越冬可能個体数の推定

6 その他

- ◆ 近年の出水でのナベヅル個体数の自然増加率は、1.025 である。周南へ毎年 30 羽移送し、すべての個体が定着したと仮定しても、10 年後の越冬個体数は 345 羽となる（参考資料 5-4 の 2）。
- ◆ 一方、平成 24 年度に試算した周南市（旧熊毛町付近）での越冬可能個体数は約 100 羽（参考資料 5-4 の 4）であり、本モデルが成功した場合は、その他の新越冬地の検討も必要である。